

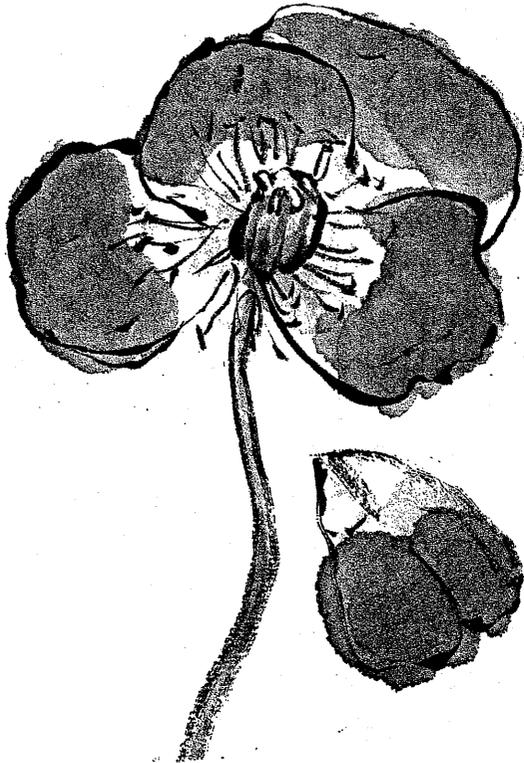
オリーブの樹

第123号

2014年5月11日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



硝煙の
句残り
草原で
ひとり歌って
別れー五月

目次

- P 2 再びパレスチナ連帯を！ 重信房子
- P 4 3月4月の歌 重信房子
- P 5 独居より 重信房子
- P14 読んだ本 重信房子
- P17 ニューヨークタイムスの安倍批判 萩尾遼
- P18 アラブ物語26 「パリ事件」ハーグ闘争から日本赤軍結成へ
ー74年(4) 重信房子

重信房子さんを支える会

リッダ闘争の5月に
再びパレスチナ連帯を!

重信 房子

リッダ闘争から42年目の5・30を迎えています。パレスチナは今も弾圧と封鎖の中でひきつづいて厳しい闘いを強いられつつ民衆の熱意に押されて、パレスチナ解放勢力統一が動きはじめています。こうしたパレスチナの闘いに再び連帯の支援を訴えます。リッダ闘争が闘われた時代には今よりも格差や不平等に憤り、搾取と抑圧に抗した世界の波がありました。闘いを支え連帯する見ず知らずの人々の力が支え合っていました。私たち日本赤軍もパレスチナ解放闘争に連帯し闘ってきたことで、また私たちが連帯の恩恵に浴し、連帯の連鎖を実感しつつ闘っていました。そうした力に救われたことは数多くありました。

一つの話、リッダ闘争記念の機会に記しておきたいと思います。

日本赤軍の1977年のダッカ闘争の厳しい闘いの中のことです。パレスチナで闘ってきた日本赤軍に対して、思いかけずバングラディッシュの人々が連帯を示してくれたのでした。『日本赤軍私史』にも記しましたが、そのおかげで作戦は失敗を免れたのです。作戦が終って再会した奥平純三さん、丸岡修さんから聞いた話です。

奥平さんら獄中から解放される予定の者たちが日航特別機でダッカ空港に着き、待機させられていた時です。日本の新聞記者から聞いたのでしょう、バングラディッシュの当局者の一人が、「あなたはリッダ闘争で戦死したリーダーの弟だというのが本当か？」と聴かれました。奥平さんは肯定も否定もせず笑顔を返しました。この人物は遠巻きにしている当局者たちのところに戻って話し、みんなこちらを向いていたが好意が感じられたそうです。その後、さらに日本語のできるバングラディッシュ当局者も加えて話かけてきました。「日本政府よりも君たちの闘いの成功を応援している」と激励し、日本側とのやりとりを説明してくれました。やっと、人質と交代に釈放される者が一人ずつ順番に機内に乗り込む段取りができました。最後に乗り込む奥平さんに、バングラディッシュの人たちが握手を求めました。そして「ダンケツ号のリーダーによく伝えてくれ(日本赤軍はハイジャック機を「団結号」として、それをコールサインに指定していた)、成功を祈る。我々は君らに良い印象を持った。パレスチナのために闘ってくれてありがとう。まだ安心するな。気をつけろ！」そう言われたそうです。そして奥平さんが機内に乗り込んだ後、管制塔から「ダンケツ！ 交信ラインを1本にしろ、他のラインはカットしてくれ」と、日高隊リーダーの丸岡さんに伝えてきました。要求に従うと、「ミスターオクダイラと話をさせてほしい」というメッセージが来ました。1ヶ所を除いて電源を切って、奥平さんが交信口に出ると、早口に先ほどの男と思われるバングラディッシュの役人が伝えてきました。「今、日本政府側は、君たちが受け入れた日航パイロットら交代要員クルーに言い含めている。今ダンケツ号は滑走路の端っこに停止している。この位置ではスペースが足りず、逆噴射で発進しなければならない位置だ。このことを利用して意図的に車輪を滑走路から落とす計画だ！ そうしたら飛行機は飛べない。新しい飛行機が必要になる。それを日本側は狙っていて飛び立たせないつもりだ。車輪を滑走路か

ら落とすよう指示を受けた交代のクルーが今からダンケツ号に乗り込もうとしている。このクルーらに操縦させてはならない！ 必ず部隊に伝えてくれ！」と切羽つまった必死の指示だったという。そして「パレスチナのためにイスラームのために平和と解放のためにリッダ闘争を闘った君たちに感謝している」「私は個人として以上を伝えた」と弁明したという。万が一の場合を考えて、弁明を「個人」と述べたのでしょう。

リッダ闘争の闘いが、連帯を呼びダッカ闘争の成功を導いてくれたのを、今、リッダ闘争と共に思い返しています。これはあの時代の一つのエピソードにすぎません。闘いが国境を越えて助け合いを育てていました。

こうした連帯の気風は時代の変化はあっても決して今も失われているとは思えません。しかし「アラブの春」とほめそやされたアラブ民衆の闘いは、外部勢力の介入や情報操作、武器の流入の中で、各地で混乱し困難な闘いに直面しています。なかでもアラブ各地に住むパレスチナ難民は、何重にも苦境を背負わされています。分裂と内紛があれば、連帯がむずかしくなってしまいます。リッダ闘争の時代以降のパレスチナの解放の歴史を辿れば、「オスロ秘密合意」を出発点とする無原則・非民主的な闘いが、パレスチナの政治性と解放を損ない、パレスチナ勢力の分裂と困難を拡大してきました。今、この混乱の中から、パレスチナ解放の闘いが、それを克服する原則に立ち返る闘い方が問われています。パレスチナ民衆の切実な望みであるパレスチナ解放勢力の統一と情報公開にもとづいた多様な原則の再確立です。去年からはじまった米国を仲介とする「和平交渉」は、ネタニヤフ政権によってまたもや時間を浪費した結果に至っています。入植地を拡大し、東エルサレムのパレスチナ人を追放し、自治区を陸海空と支配するネタニヤフ政権はもともと譲歩も妥協もする気はありません。

ファタハ自治政府は時間を浪費するこうした「和平交渉」をとりやめ、何よりもパレスチナ人民の統一の要求の実現、選挙にはじまるパレスチナの主体統一こそ問われています。真摯にパレスチナ人民に向き合うこと抜きに、66年も祖国への帰還を待ち続けている500万を超えるパレスチナ難民に伝えることはできません。30余万のシリアに住んでいたパレスチナ難民は、何重もの苦しみの中にあります。

パレスチナ解放勢力の統一によって世界の人々の良心を連帯の力に結び、パレスチナの真の解放の闘いの戦列が再構築されることを願ってやみません。(因みに国連は2014年をパレスチナ連帯年と決議しています。)

パレスチナに統一と連帯を更に!

三月四月の歌

重信 房子

女性の日ベルリンの街肩を組み赤いバラ抱きし友ら何処に
 三・一一飛行機雲の白一筋青空切り裂き北へと伸びる
 春一番吾子の便りに省かれた戦況測りつ安全願う
 群青の海に下弦の月燃ゆる彼岸明けゆく有明の獄
 人住めぬフクシマの地花吹雪安全讃える看板に降る
 タラの芽を探して藪に分け入れば天蓋の如く山藤が満つ
 月明かり避けて潜みし斥候の眼下に広がるパレスチナ祖国
 曲がりくねる難民キャンプの路地の先ふいに群れ咲くブーゲンビリア
 すすらんとツツジ咲きはじむ小道ゆく獄にも等しく春の陽注ぐ

晩居より 3月10日~5月10日

「集団的自衛権」は米にとっての駒を増やす
「自衛権」ではなく「他衛権」

重信 房子

3月11日 あの東北の大震災「フクシマ」から3年目の今日は静かな快晴です。でもこの空気は冷たくてまだ冬の気温8〜3℃。3年目の今も26万7,419人が避難生活を強いられ仮設住宅には、10万4,050世帯が暮らしているとのこと。死者は1万5,884人、行方不明者2,633人、更に「震災関連死」は認定されただけで2,973人。今も復旧復興は、ことに「フクシマ」の原発やその地域に示されているようにほど遠い……。政府のかかわりは「再稼働」「原発輸出」の野望にあらわれている通りです。午後2時46分獄窓を開けると冷たい風と青い空。黙祷の合図をきいて被災した人々「人災」の被害者、シリア、レバノン、パレスチナの人々の命を思い黙祷しました。

「選択」や中東の記事ありがとう。レバノンはずでに戦場。ことに東部バールベックのシリア領近くから「ヌスラ戦線」らがヒズブラーの村を攻撃し、呼応するようにイスラエルがそこを空爆。また、南部ヒズブラーの村もイスラエルが空爆。イラン、イラク、シリアの政権とヒズブラーの勢力を弱体化したいというイスラエルの動きは挑発的です。レバノンとの戦争にもちこもうとする企てか？ 新聞には載らない中東はエジプトも含めて激しく流動しています。

T子さんありがとうございます。多忙中、体調はよくなりましたか？

3月12日 9時から歯科指名医診察。先週の調整の噛み合わせが不具合で膨れてしまったことを伝え修正して頂いた。また指名医と弁護士で話し、今の減りの早い義歯より固く噛み合わせが減りにくいものを上の奥歯だけ作り直すことにしたいと伝えてくれた。半年に一度のメンテナンスができなくても、減り方が少ない上質のものならましなので作ることを前回勧められて、私も希望を伝えていたものです。それで新たに歯型取りもやりました。指名医が多忙のため、去年のようにすぐ来れる訳ではないが、こちらの保健課とスケジュールを調整して移監前にはできあがるようお願いしました。

3月17日 夕方、資料やお便り受け取りました。感謝。中東情勢、日本の脱原発の関いの報告の資料など

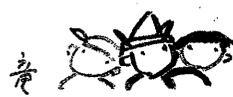
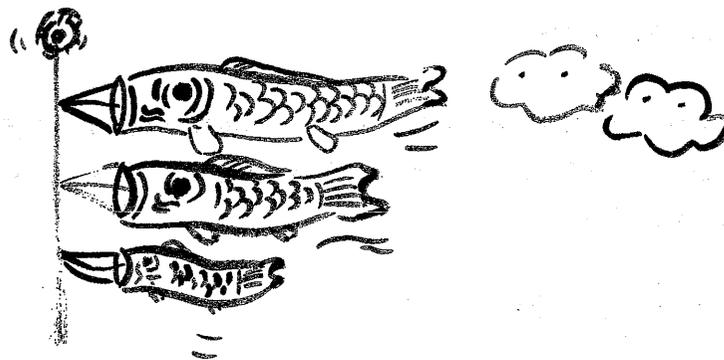
これから学習します。「フォーリンアフェアーズ」の日本、中国、ウクライナ情勢など読みたかった論文もありがたい。「中東、東欧、アフリカで大規模な国境変更が起きています。20世紀の近代国民国家の溶解が始まっていき、ようやく21世紀が姿を現し出したといえるのかもしれませんが」と友人。

ちょうど私も「アメリカの覆権にはもう期待できない」(中東研究者の池内恵の論文。文芸春秋4月号)を読んだところ。アメリカのオバマ政権のコストカッター的合理主義的な政策が中東、欧、アジアの同盟国と矛盾をきたし、同盟国の「アメリカ離れ」「強いられ自立化」が求められている、と。この文脈の中で安倍政権の政策を「あたりまえ」という方向で容認している内容です。この人の論文は人民の側の視点がいつも欠けているのですが、「グローバル化」が政治経済的に格差を極限化しつつある分、世界のどの国も強権的に国家主義を謳う勢力が力をもつ局面にあるのは事実です。でも、それは緊張を高め危険の中で破産していくでしょう。その先に協調と公正が渴望されるのは目に見えています。

M子さん多忙の中ていねいに「脱原発」から「唐牛健太郎を問う」講演会まで伝えてくれてありがとう。3/8円山公園で「パイパイ原発」の2500人の集いもすごいですね！「制服向上委員会」の楽しそうなライブをきいてみたい！3/9大阪扇町公園(昔デモで集ったりしたなあ……)7000人の集い、小出裕章さんの講演と制服向上委員会のライブ。東京は3万2000人の脱原発集会3月9日。日比谷野音は超満員で入りきれなかったとのこと。報告は胸熱くします。闘いつづけることによって国のまがかった進路を正す、正せるというみんなの意気を感じつつ読んでいます！

MMさん関電前3・11火曜行動楽しそう！みんな踊ってるのね？！香り女さんもキュウピットおばさんも!! 軽やかな感じが伝わります。私なら盆踊り風の踊りで参加だな……と思いつつ。“関電の抗議行動分断の溝を越えたしたとえ夢でも”の一首。

Kさんありがとう！緑の新芽?! こちらはまだこれからです。でもどつと獄外の元気な生活や活動のニュースに接して我が心も春！です。



3月18日 「3・30土地の日」も、もうすぐです。今日届いた「救援」に東京での3・29土地の日の集いの案内が載っていました。この集いで、山形ドキュメンタリー映画祭で受賞した、パレスチナ人監督作品「我々のものでない世界」が上映されるとのこと。また、「イスラエルによるパレスチナ占領の拡大継続の現状」の討論会も企画されているとのこと。

ちょうど昨日、PLO議長であり、自治政府大統領のアッパスは、オバマと会談しています。去年7月、ケリー国務長官の仲介で「直接和平交渉」が始まったのは、誰も期待せず、何の成果もなく、今に至っています。イスラエルのネタニヤフ首相の入植地拡大政策故です。「土地の日」パレスチナ連帯行動が世界各地で示されます。小さくても毎年日本でこの日に連帯の集いが東京・関西で続けられています。持続は次の力を育てます！連帯！映画も見たいです。

デジカメ歌人の「啓蟄」の便りは、「鶯、牛、梅とくれば菅原道真公です」と梅だより。寒さに梅も少し遅れているとのこと。「濁流に負けず立ちたる枯れ草が僅かの雪に倒れ伏したり」その瞬間が目に見えぬ一首です。

3月20日 夕方、「オリーブの樹」122号受け取りました。作成・印刷・発送の皆さんありがとう。「編集後記」にあるように、萩尾さんも辻さんもすっかり「安倍政権批判」です。批判してもしたりない所業が次々と続きますね。「武器輸出」「集団的自衛権」と益々突き進む気配。次の「オリーブの樹」にもまた続いて書いてください。今号の表紙に選んでくださった私の短歌はちょっと直裁でしたが、レモンの味わいと字が真直ぐを示しているいいですね。それに欲しかった「ツイッター入りカット(絵)がいくつも！こんな風なカットの楽しい絵が字ばかりで読みにくい日誌に、少し間を作り出してくれています。ありがとう！これからの三連休にゆっくり読み直します。

今日の新聞では、ロシアの「クリミア併合」にG8崩壊のニュース。これから「ロシア制裁が叫ばれ、シリア中東情勢もさらに緊張が連動していくでしょう。「ヤルタ・ポツダム体制」「冷戦」「ソ連東欧崩壊」を経て「戦後レジーム」が変動流動していく潮目にあるのかも知れません。

MOさんありがとう。大阪関電本社前の集い、活気に満ちている様子を知らせて、「水戸巖著作講演集」送ってくださったとのこと。来週受け取れると期待しています。「水戸さんの本から改めて原発問題の基本から学び直し本質を捉え、未来を考える本として普及する

ことを願い、微力ながら水戸喜世子さんのお手伝いをしているつもりです」との真摯な姿勢に学びつつ、私もぜひ学習します。

3月21日 墓参り、彼岸日和です。昼膳に、おはぎ(ぼたもち)一つ加えられ、おいしく頂きました。今日は両親の写真を取り出し、彼岸の挨拶。

それから「オリーブの樹」をじっくり読んでいます。122号になったのですね……。2001年の公判の直前か直後にNO.1が出ました。それから毎月、そして最高裁判決が出て、刑の執行の後からは、2ヵ月に1回、現在に至っています。今後とも、購読よろしくをお願いします。

3月24日 入浴し、終わる頃ちょうど姉の面会！あわてて髪を梳き、面会室へ。姉は花粉症で、今日みえない日は辛そうです。多忙にさせてごめん！話し足りないうちに「時間です！」と言われてしまいました。

「泉水国賠通信」受け取りました。表紙の「あやとり」の絵がなんともいいですね。泉水さんは、風邪で体調を崩しながら、休むと処遇「評価」が落とされるため、がんばって働かざるを得ない、厳しい状況のようです。何もできずに申し訳ない……。水田さんの「面会記」で、よく実情がわかり、寒さ、病気を克服する春を願わずにはいられません。また、パーシム奥平に関しての文も考えつつ、読みました。水田ふうさんの語り口に現れる人柄で、多くの方が泉水さんを知り、お便りくださっていること嬉しく読んでいます。公判の良い進展を祈るばかりです。

3月25日 MOさんの送ってくださった水戸巖さんの本「原爆は滅びゆく恐竜である」受け取りました。時間をかけて読んでみます。また、せっかく送ってくださったワッペンシール(SAVE LIFE)5枚は配布不許可でした！残念。でも、しっかり見て触りました。お揃いのすごい素敵なお衣装の「脱原発3・11」ダンスの写真は届きました。20代と40代(50代！?)とも見えますが、センスの良いジャケットにインナーミニ！ダンス！いいなあ！連帯！

また、いつも資料など送ってくださるMさん、出たばかりの月間「治安フォーラム4」を送っていただきました。ありがとう。治安、公安警察、当局者たちの月刊誌でしょうか。はじめて読んでいます。

今号に「日本赤軍～活動40年、今何を思う」というタイトルの梶尾泰嗣という人の論文が載っています。むっと腹立て苦笑いして読みました。年若い関係者向

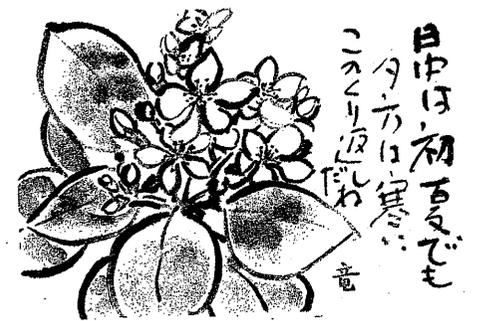
けに「日本赤軍の犯罪」の歴史を教えるような内容です。「空しく空々しい解放宣言」を批判し、「解放宣言後も総括していない」とさらに批判。「日本において日本人民は武装闘争を望んでいません。そういう状況もないことを知っている」という「重信解放宣言」は軍事を否定していない。公判に有利な状況を作ろうとしたもの。「日本赤軍は、真摯に回答する義務を負っている」「目を背けてはいけない」とのこと。総括は「リッダ闘争らの被害者や遺族に謝罪し、全ての事件の真実を明らかにし逃亡中のメンバーらが悔い改め身柄が司直の手に委ねられること以外総括はない」としています。そして、今でも「逃亡中」の者や「ムーブメント連帯」として日本赤軍は活動していると喚起を促しています。「啓蒙」と、また「予算確保」の「ためにする一文」かも……と思いました。

「解放宣言」や「総括」は「転向」ではないのですが、この論者の「総括」は「転向」の強要のようですが、この論者の「総括」は「転向」の強要のようですが、解散13年を越えて、「危険視」し続けたいようですね。

3月26日 オランダの「核安保サミット」は「クリミア問題」から「G7」会議に力点が移っています。「G8崩壊」といって、ロシアを閉め出しても、もともと「G8」にはグローバル時代を確定する力はなく、なっていて、「G20」に移行していたので、ロシアには気にならないでしょう。それに、「ウクライナ問題」の発生は、ユーチューブなどで会話が暴露されているように、米駐ウクライナ大使らの巨額の金と采配で、合法的政権を一挙にクーデター的につぶしたことから「クリミア問題」へと流動してしまったのですから。

今、夕方の受信届けられました。I子さんありがとう！「制服向上委員会」のことどんなか知らなかったけど、あの素直なダンスが「おばさん制服向上委員会」だったのね！「エンジェルおばちゃん制服向上委」か「おねえさん〜」に変えたら？！若々しいもの！

3月27日 I子さんフェイスブックを介してシリアの友人とも連絡とれてよかったですね。昔では考えられないツールです。また中国留学の友人の言葉「日本人は歴史や現実のアジア人たちの感情、考え方をわからなさすぎるなあ」と改めて思うには同感。海外では強くそれ実感します。昔、小田実さんと朝日ジャーナル企画対談した時、彼も同じこと言ってました。そして「日本の歴史の教え方には『世界史(アジア史)の中の日本』というとらえ方がなく『日本史』と『世界史』を別々の世界にしているのが問題で、それは日本の教え方だけだよ」と言ってました。今は変わったで



しょうか？アジアから照り返される自分たちの実相を大切にせず、アメリカにどう思われたかで一喜一憂する政治の在り方の結果でもありますね。Iさんはやすやす国境をこえていますね！

3月28日 今日の新聞は「袴田事件」48年ぶりに「再審決定」と報じています。捜査機関が重要な証拠を捏造した疑いを認め「拘留の続行は耐え難いほど正義に反する」と刑の執行停止も決定。遅すぎる決定ではありますが、冤罪で国に殺される前に再審となったこと、胸にこみ上げる想いで袴田さんの姉の喜びの声を読みました。死刑制度の恐ろしさを改めて国民が実感し、死刑制度の廃止にも扉を開くことに期待します。

友人よりレバノン地図入りで資料とレポート。シリア国境近くにあるパルベック郡アルサール村での攻防、ヒズブラーに対するイスラエルの空爆やアルカイダ勢力の動きもわかります。パルベックの混乱からレバノンへ戦争拡大を企み、南部のヒズブラーを叩こうとするイスラエルの危険性が増大しそうです。「世界はもはやまとまっている必要ない。リスクは押し付け、利益は自分」という傾向が大国、地域金満国の本音で、貧しく小さい国とその住民は益々犠牲にさらされています。

3月30日 今日は雨で午後風が強い日です。「パレスチナ土地の日」です。ちょうど週末届いた人民新聞に関西での土地の日企画「農業支援からパレスチナを考える」の案内が載っていました。交流会はアラブのお菓子と飲み物とのこと。パレスチナに連帯に連帯！

3月31日 よど号「国賠訴訟」は請求棄却されたとのこと、日本での「国賠訴訟」のむずかしさを改めて考えさせられます。でも諦めずに訴えつつける中で風穴をあけていく「袴田事件」を教訓に、司法をもっと

「裁判官の罪と責任」を問いつつ改革することをめざしてほしいです。

4月1日 「季刊アラブ」やアラブ情勢などの最新情報も届き熱中して読んでいます。トルコは好戦的にシリアに戦争をしかけようとしているようですね。エルドアン首相は国内の汚職疑惑そらしや選挙対策もあったのか、ロシアのクリミア「併合」でのタタール人(トルコ人)対応でロシアと同盟するシリアを叩くのか、トルコ国境地帯戦闘激化ですね。

3月23日にはトルコ軍がシリアのミグ戦闘機を撃墜。3月25日から26日にかけて開催されたアラブ首脳会議も足並みを揃え反体制「シリア国民連合」への支援強化を謳い、弱体化分裂した反政府勢力へのテコ入れを計っています。それが奏功して激しい戦争は政府軍に被害を与えている様子。

3月26日の記事ではトルコのエルドアン首相が外相らと交わした音声で26日ユーチューブにアップされたとのこと。会話の中で首相はアレッポ北部に位置する史跡で、トルコ軍が管轄している「スレイマン・シャー廟」について「この廟への攻撃を我々にとってのチャンスと捉えなければならぬ」と述べたのに対し、国家諜報機構(MIT)の長官は「そうする必要があるのでシリアから4人を送りましょう。トルコにミサイル攻撃を行うよう命令し、戦争の理由を作りましょう。必要ならスレイマン・シャー廟の攻撃も準備します」と答えているとのこと。トルコ外務省は「一部改ざんされている」「国家安全保障に対する卑劣な攻撃」と断言したとの記事。

戦争の謀略は激しさを増し、トルコ国境ばかりかレバノンもシリア国境地帯の地上戦、市内での「爆弾テロ」など増加しています。イスラエルは「やっつけたアルカイダ系勢力」と「排除したいアサド政府軍」の消耗戦をひそかに喜んでいてと思います。「次の手」を考えているのでしょうか。住民たちの悲惨な状況は住民たち同士の助け合いでは限界をはるかに越えているのに……。シリア国内避難民は約600万人超、国外難民は350万人との数字が記されています。一人一人に語りきれない苦しみ憤り悲しみがあることを忘れないようにしたい……。

一方エジプトではモルスイ大統領支持の529人が3月24日死刑判決。昨年起きた警察官一人の死亡に対し、裁判はたった2日。それも大多数の人が拘束されたまま公判に出廷できずに「集団死刑宣言」。「アラブの春」と西側がほめそやした民衆の叫びは軍事力と金のあるスポンサーによって蹴散らされています。

それでも闘い続ける人々が居る限り次の局面が必ず拓かれる！と見守るしかない……。

4月2日 新聞ではSTAP細胞論文に捏造と改ざんがあったと理研側の報告。小保方晴子氏は「驚きと憤り」を表明し、不服申し立てをすること。論文撤回も同意しないとのこと。理研は「STAP細胞の有無はゼロから検証」すること。私には科学的詳細は判断のしようがないけれど、福岡伸一博士は「科学でいちばんシンプルな原則は『再現性』である。発見された現象なり効果が第三者の手によって観察されて、科学的な事実は確定する」と言っているように、小保方さんには「新発見」か「かんちがい」かを、再現性で結着つけてほしい。それまではがんばれ！と応援したい私です。理研のあり方こそ改革必要では？と。

4月4日 今日はいいいことあるかな……と期待したのですが、午後3時前、面会担当の係官が来て、「面会に来た人があったが、話をして帰ってもらったので、知らせます」とのこと。こんなに遠くまで面会に来てくれたのに、U君とは会えませんでした。申し訳ないことでした。何か面会する特別な理由がない限り旧友でも不可のようです。桜満開の八王子にせっかく春を届けようとしてくれたのに……。

4月7日 今朝もスチームが入りました。寒波のため少しだけ寒い。でも、11時半からは観桜会です。12時前に屋外に出ると、桜！桜！満開のソメイヨシノ、山桜に枝垂桜も満開。八重桜は蕾のまま。プールサイドを囲い、まわりにシートを敷いて花見会場。紅白の幕に、茶席の飾り。和傘に畳の縁台。茶釜も。BGMも「花は咲く」や「桜」など。暖かくて風もなく、少し花弁が散りはじめていい雰囲気。まず昼食。チキンにトマトソース、マカロニ黄な粉和え、黄桃。外で食べるとやはりおいしいです。

その後は一人ずつファイルが渡されました。季語、俳句、短歌の意味と例題がファイルされていて、学習しつつ、写生、イラスト、俳句、今年から短歌も。その中から、一作品提出するのです。ちょっと桜を写生して、句を考えて、桜を見上げて、1時40分終了。中庭の桜を見学しながら巡回して帰舎。やっぱり、思い切り桜の花を目に留められてうれしいです。

U君から、金曜日に面会を断られた直後のハガキに「親族でなくて、緊急の用事でないと、安否伺いでは許可できないそうです」とのこと。本「永久敗戦論」「原発ホワイトアウト」などやカンパもありがとう。

遠出してくださって申し訳ないです。でもまた、必ず合いましょう。

KIさん、八重桜みたいですが、花桃なのですね。庭は花々が次々と咲き出しているでしょう。また彼の命日が巡って来ます。どんな風に過ごすのでしょうか。元気であることが彼を喜ばせますよ！六回忌になるのですね。合掌。

MMさんは益々元気で60代最後のお便りありがとうございます。ハッピーバースデー！「歳をとるとその分勉強することが減るのではなく、益々増える気がします。」同感です。昔より学習したい！という気分が強くなりますね。どうか健康でみずみずしい感性のままに！“よく似合うこの町に咲くこの梅”

4月8日 花祭りの日。今日も朝スチームが入りました。

I子さん「制服向上委員会」を私が誤解しないように「カワイイし、カッコイイのです！」と記事送ってくださいました。いえいえ誤解していません。「カワイイ+カッコイイ！」この若者たち同様「エンゼルおばちゃんたちの制服向上委員会」の私はファンです、「火怨」(上) ありがとう。

「関西の土地の日集会、今までで一番よかったです。西岸農業支援をやって来られた若い方のお話が、たぶんお人柄が大きく作用して、具体的でオリブの木をわたる風や土の匂いが伝わって来るようでした」、「土地の日」にふさわしいお話でした」とのこと。私も嬉しい！

「土地の日」は、またユセフ檜森さんが自決した日です。3月30日「土地の日」を思い、また夕方にはユセフを思い一首零れました。

“桜吹雪火災と化して殉教に旅立ちし君十三回忌”

4月10日 今日の新聞は、STAP細胞の記事一色。小保方さん記者会見他です。やはり、再現、再立証でしか真実は示されないと。理研がそれをさしおいて、記者会見で研究姿勢や懲罰的な方向に導いたのが問題を作ったと思います。でも「簡単」な等なもの、再現に「こつ」が要るの？再現が成立しないのは「勘違い」？焦点をSTAP細胞再現にしぼって一致協力してやれば、またちがう新しい発見が生まれる気がします。

4月11日 窓の外には花吹雪！午後には姉の面会。両親の法事を20日に行うなど話しつつ、花がきれい！と、姉の花粉症の話は尽きず。

夕方、デジカメ歌人「春分」と「清明」の節句のお便り一緒に頂きました。“春の青梅沈丁花重なる香り聖にも非ず俗にも非ず”金閣寺、銀閣寺を訪ねたのですね。銀閣寺のすぐ下の友人の下宿に入りびたって、銀閣寺を庭のようにすごした69~70年を思い返しています。

4月14日 今日は、花祭法要、一人ずつ花御堂に甘茶を掛けて祈り。法話は「天上天下唯我独尊」の意味についてわかり易く話してくださいました。どの命、人間も、動物も、また生物も尊いという話を聞きながら、11日の安倍首相らの原発再稼働決定にまた怒りが湧きます。ラジオで数日前、「『日本国憲法9条』にノーベル平和賞を！」が正式に受け付けられたとのこと。ノーベル平和賞は極めて政治的な賞です。海外と国内市民で安倍政権の危険な動きを封じる一つの方法になりうるかも知れません。そうなれば日本は「平和省」を持つ国へとさらに人々の側から包囲したいところです。

4月15日 今日の新聞で「小泉・細川氏脱原発で再びタッグ」との記事。「自然エネルギー推進会議」の設立の活動方針には「異議無し！」ですね。それは、①原発ゼロと再生可能エネルギー普及促進 ②原発再稼働反対 ③原発輸出反対 ですって。影響力のある人たちが訴えることで「秘密保護法」などで脱原発や市民運動つぶしが激しくなる前に対抗勢力形成が広まるのは、とても大切です。「脱原発」は、外交や軍事問題にも関連して安倍政権の野望を損なう筈です。都知事選の教訓をいかして「統一」を力にしてほしいです。

「選択」では「イラクの分裂」を扱った論文、今日入手して読んでます。「クルド独立の環境は着々整っている」というもの。私もそう考えていました。イラク内も、シリア内戦に連動して政権(シーア派)に対する対立も激しくなっていて、クルド(スンニ派)地域ではすでに米系国際石油企業が、クルド自治政府と直接取引をしていて、実体はつくられています。プッシュの時代、「侵略後の国づくりがうまくいかなければ、石油のあるクルド地域は独立させよう」という「ネオコン構想」がありました。

「クルド独立」は更に中東大変動を作り出しそうです。クリミア以外、あちこちが国境変更を余儀なくされている時代。それらは、中東では宗派対立を益々激しくさせ、住民たちが、益々困難を強いられているのが目に見えています。もちろん、年来の悲願である「クルド民族独立国家」は複雑で、すぐ実現可能とはなら

ないでしょうけれど。

4月17日 昨16日は、父の命日でもありました。ちょうど午後には「救援」も届いて、救援連絡センター45周年総会のことや、「泉水公判」の様子を知りました。今号はガサ子ちゃん倶楽部の平井さんもまた山中さんも「原発は減びゆく恐竜である」の書評を記しています。ことに「救援連絡センターの水戸さん」のこと、知る人だけに書きたい気持ちがあふれたのでしょう。センターも45周年、これから益々なくてはならない「反弾圧のみんなの拠り所」としてみんなで支えてほしいです。

Kさん、お便りありがとうございます。八王子もとても過ごしやすい春になりましたよ。

4月18日 あら、朝から雨です。

届いた「アソシエーション」に、とっても良い内容が載っています。茨城の守谷市に本部を置く「常総生活協同組合」の活動の話です。

茨城南部から千葉北西部を配達エリアとし、食の地域自給や原発運動に早くから取り組んできた常総生活協同組合が、3年前の震災・原発事故に、どのように受け止め行動してきたのかを、副理事長や組合員の方が率直に語っている記録です。3・11の震災と原発の危機の中で、「ああ、これで生協は終わった」と「若い人から組合員を避難させよう」などと、3月12日に「事業撤退計画」をたてる決断の良さ。13日の生協ニューズレターで「原発は炉心溶解。プルーム通過に注意して屋内退避を！ 関東圏退避を！」と決断配布したが、「生協どころか」と、地域の牛乳、水の汚染に母乳、土壌、野菜の調査。検査費用の高さに、自分たちでやろうと、器材を購入して地域で一致して取り組んできた様々な助け合い、創造性・団結が語られています。



「必要」から取り組む姿は、生協が古く始まった海外での初期の「協同性」「人と人との関係」の豊かさを改めて思い、日本の可能性はこうした地域での協同の中で育っていることを実感しました。当初から「チェルノブイリ事故」や「脱原発」の問題意識があった副理事長らのリーダーシップも大きかったのかもしれませんが。下から横への現在の政治に対抗する社会がさらに育つことを描きつつ読みました。

4月21日 週末から今日もぐずつて寒い。雨が降りだしている夕方です。M子さん、お便りや資料ありがとうございます。少し上の世代の市大のSさんのこと、末期の肺癌ながら、沖縄で高江の「米軍ヘリパット基地建設反対」や近くの「辺野古基地建設反対運動」をずっと続けてこられ、市大の友人たちでお見舞いと連帯で、3月に沖縄に行かれたのですね。そして4月7日に亡くなられたとのこと。自分の思い通りに闘いながら、毎朝座り込みを続け地元の人々に愛されて逝ったのは、幸せな最期といえますね。本当に……。そんなふうに闘いつつ果てるのは、かつての闘いを知る仲間たちの理想かもしれませんね。でも彼には、まだまだ若いのであれこれとあれこれとやり続けてほしいです。

大阪の毎月6日「秘密保護法」に反対する集いとデモの鮮やかな写真、扇町公園ってなつかしい。大阪もよく知らなかったのに、みんなと扇町公園のデモ集会に行ったのを思い返しつつ。全国で、6日には秘密保護法廃止の集会デモがあるのですね。連帯を！ワン・ニャンたちによろしく。彼にももちろん感謝を！

MMさん、いいドキュメンタリー映画（大阪朝鮮高校のラグビー部に3年密着取材して作られた作品）だったのですね。橋下徹が朝高を笑顔で訪問し、結局難癖をつけて補助金カットの様子もドキュメンタリーにあるとのこと。“在日の朝鮮人のドキュメント日本社会を鋭く抉る”

4月22日 春うららのやとすっきり晴の午前中。午後はまた小雨が降っています。

夕方、U君からの「春の午後の御茶ノ水界限」の写真とお便り受け取りました。うわあ！ 駅はちっとも変わってないですね。「駅前交番、何度も消失した！」とコメント付の交番。カルチェラタンで解放区として赤旗掲げた交番は、モダンに変身。明大通りの感じは変わらないけれど、「もう『丘』も『田園』もありません」とのこと。これが明大リパティタワーですか。初めて確認！ この建物は宮崎先生が明大総長の時に建てた

ものです。先生は、あの明大記念館をなんとか残したかったのですが、地震対策や建物の壁など寿命で無理だったとのこと。そこで、その記念館の建物の一部を、記念にリパティタワーの何階かに展示配置するようにしたそうです。いつか行ってみたい場所です。もう学館のあたりも様変わりですね。今年は「祭」のみごとなアジサイの写真届くかな？ いい写真ありがとうございます！

4月23日 快晴。今日は窓を開けても寒くない。いい天気午前中、布団を干してくれました。

コーラスが終わって整列していると、「診察です！」の呼び出しにあわてて診察室へ。主治医が4月14日の採血検査の結果、また腫瘍マーカーのCEAが5.6に上がってしまったと伝えてくれました。(5.0以下正常)「え?! もう大丈夫と思っていたのですが……」と私。DRは「心配しなくていいですよ。重信さんの場合は波があるだけかもしれないし。次の検査でも5.6以上に段々上がってきたらキケンですが。次回の検査でみてみましょう」とおっしゃった。2カ月に一回、腫瘍マーカーをチェックしています。今回正常範囲で移転と言われるかな……と思っていたのですが、次の検査もすることになりました。私としては、高めの腫瘍マーカーが正常範囲とはいえ、続いていたので、ここでチェックしてもらえるのはありがたいことです。「土曜会」医務官クラケンの助言が聞きたいところです。

宮崎先生、お便りありがとうございます。まだ闘病中ながら、「男性の平均寿命を遥かに超え、すでに十分生きてこれたのですから満足し、少しでも社会に役立つ余生を送りたいと思います」と、志高く意気さかんです。学んで私もできることを、少しでも前向きな役立つ力へとめざして生きていきます。

4月24日 YNさん、たくさんの労力をかけて、レポートをありがとうございます。4月5日、「土曜会」それに「中沢さん偲ぶ会」「明大二部交流会」も、嬉しく読みました。錦華公園（毎年、神田古本市の中心でした）の桜と明大リパティタワーの絵ハガキのようにきれいな写真、いい絵ですね。「土曜会」は盛り沢山。みんながそれぞれボランティアの現場を持っていて、それを報告し、必要な要請には、司会のR介が捌きつつ協力を広げあっているのが、実況中継風にわかります。

～イトスピーチ反対闘争「のりこえねっ」とをWMさんやっているので、R介は「伊達判決（砂川闘争）生かす会」の報告、リパティタワーで、200人参加の集い「再審請求」は良い考えですね。安倍政権

が荒唐無稽に最高裁判決文の一部から「集団的自衛権」の「論拠」を騒ぎ立てているし、またこの最高裁判決がアメリカの指示だったという証拠も出たのですから。その他いっぱい報告。「再稼働阻止ネットワーク」や芝浦工大の参加者から「水戸巖さんの本『原発は減びゆく恐竜である』増刷決定、その他にも広く読んでほしい」とのこと。同感！

「中沢さんを偲ぶ会」何人も友人や知り合い参加、OさんやTH君の話も印象的です。

また、「二部交流会」意義わかります。二部の人間的、家族的繋がりがこの交流会に、ほのぼの感じられます。YIさんもKGもON君SG君も来たのね。なんだか身近に居る気分。読んでるだけで情景が浮かびます。YNさんいつもありがとうございます。

“原発は減びゆく恐竜と喝破せし
水戸巖の意志蘇える春”

4月25日 オバマ来日はマスコミが騒ぐ程の目新しいものはなし。随処に「安倍首相がやっています！」のプロパガンダばかりのイベントでした。「集団的自衛権」も米国のお墨付を大仰に演出。それは米にとっては賛成でしょう。駒が増えるのですから。「自衛権」ではなく「他衛権」です。アジアの緊張を高めてばかりの安倍政権。

Kさん、彼が彼岸に逝って5年目でしたね。彼のお寺のみごとな桜の写真ありがとうございます！こんな春は散歩していても彼と一緒に歩いている気がふとすることはありませんか。元気で居てください。

4月27日 昨日からゴールデンウィーク、春らしい八王子。でも、最低温度は7℃で、少し寒い。

5月は「イスラエル建国」がなされ、パレスチナ人が突如の虐殺追放の破局（ナクバ）に突き落とされた月。新聞でもこの頃になると「パレスチナ」が記事になります。「時間の浪費」と言われたイスラエル・パレスチナの「和平交渉」は4月末までの期限直前に頓挫。当然のことです。パレスチナ側のみ議歩を強い、入植地拡大や東エルサレムからパレスチナ人追放、やりたい放題のネタニヤフ政権は、実は「和平」など考えていないからです。4月23日、ハマスとファタハが和解し、暫定統一政府を作ることに合意したことに反発し、ネタニヤフは「アッバス議長は和平ではなく、ハマスを選んだ」などと口実を作り、責任をパレスチナ側に押し付けて、和平交渉中絶を正当化しています。ハマスとファタハの統一政府による自治政府大統領と評議会選挙の合意は、何年もムバラク政権の仲介

オリブの嶺 第123号

で話し合ってきた懸案事項です。パレスチナ民衆の第一の願いが解放勢力の統一であり、民主的なその再建です。PFLPを中心に分裂を統一へと求め続けてきました。そのためには、PLOを改組し、ハマースもPLOに加え、1974年国連オブザーバー資格を勝ち取ったPLOに“パレスチナ人の唯一合法的代表”としての役割を果たせるよう求めてきました。(ハマースは、74年当時存在せず、インティファダの89~90年に登場した。また、93年「オスロ合意」を批判し、全土解放戦略を掲げてPLOと対立し、PLOと別個に闘っていた。)

PLOの役割が「オスロ秘密合意」を経て、なしくずし的に形骸化していきました。「自治区」の実体化に焦点がいき、アラブ諸国の難民キャンプなどに暮らすその何百万人の人々が「帰還の権利」もあまいになし崩しにされていきました。PLO議長が自治政府大統領を兼ねていることで、自治政府が全パレスチナ人を代表するような役割を負ってしまいました。それでは世界各地に暮らすパレスチナ人を切り捨てようとするイスラエルの思う壺です。自治区に暮らすパレスチナ人のみならず、世界各地のパレスチナ人の「帰還」を含む権利を実現する主体はPLOです。

アッバスらはイスラエルとの交渉の「戦術」としてハマースとの「和解」を計るのではなく、真摯にパレスチナ人民の要求に向き合うこと、アラブ民衆蜂起の混乱の中で、解放運動の統一からイスラエルの占領に抵抗するパレスチナの新しい時代を拓くことを願うばかりです。かつてアラブ民衆の羅針盤としてパレスチナ解放の闘いがあったように。

4月28日 連休の天候は今のところいいですね。4・28の沖繩デーは、いつも好天で、藤が咲いていたのを記憶。日比谷公園だったか。

くりあげメーデーに安倍首相が参加。押し付けがましい登壇に「連合」の今の現状が示されています。二極化する労働現場の派遣、非正規雇用の人々にとって権利を守ってくれるとは思えませんね。それに安倍首相、去年は「主権回復の日」とさんざん騒いで万歳三唱した式典の評判悪かったためか、今年はどうなったのか聞かえてきません。

Y先生からの2月7日付のハバナからのお便り、今日受け取りました。「エアメール」とシールが貼ってあるのに、2ヶ月以上もかかって!! 日本映画についてハバナ大学で講演するため、一週間ハバナに滞在中のこと。「沖繩について講義したところ、『米軍の軍事拠点だった点は、革命前のキューバと似ているが、わ

が国は強い民族主義のもとに民族自決を果たした。沖繩の独立運動はどうなっているのか」と、逆に学生たちに問いただされました」とのこと。先生の抗議もフィールドワークも健在ですね。「アベイズム」の排外主義プロパガンダが盛んな日本。どうか、海外から見える日本の素顔を日本にフィードバックして、若者たちに伝えてください。体調はOKでしょうか。帰国して今頃、また海外でしょうか。

4月30日 少し冷えると思ったら朝から雨です。南風強く雨が窓を叩いています。

休みの日は受信物交付はなく、その分、翌日の今日はたくさん交付物を受け取れます。連休中に読んだり、学習するものが増えてニコニコ。

宮崎先生、体調はきつと厳しいでしょうが、意志強固な好奇心の先生、明るく“久々にひねってみよう珍俳句”と俳句が届きました。“ベッドから車椅子へと一苦労”“ぎこちなく杖を頼りに一回り”“リハビリに夢を託して春を待つ”など。元気で共に病気を克服しましょう! 先生に倣いつつこちらも元気です。

デジカメ歌人は「靱雨」の便り。みごとなシャガの花。カトリアのよう。知りませんでした。「シャガ(射手)は三信体故に実は結ばない」とのこと。『ぬばたまの』枕詞の漢字は『射干玉の』であり、晩春の花は沢浴いや月陰を彩る」と。暗い日陰に、はっとするシャガを見つけますが、「ぬばたま」黒や闇の枕詞はシャガと通じていたのですね。“陽に光る陽と共に姫踊り子草、仏の座の紫は田に動き込まれたり”こちらにも姫踊り草が咲いています。

“行く春にしばし別れを惜しみけり”とMMさんの一句。友人たちのお便りの句や短歌に刺激されています!

さっきTV鑑賞で廊下に整列していたら、観覧会の時の写生の絵、俳句、短歌の選考結果が貼り出されていました。私の短歌は「特選」でした。“儂い時経て命叶うなら吾子と訪ねん桜(はな)吹雪の里”です。お便りの句や歌が、私に、いつも心を俳句や歌に向けてくれているおかげです。

5月1日 メーデーの日、快晴です。安倍首相を招かない当たり前のメーデーが各地で行われていることでしょう。春のグラウンドへ。花盛りのスズランの白、ツツジが緋色のほか藤色、白と咲きそろい、その足下に紋白蝶、蜜蜂が寄っています。この自然の風を東拘に居る将司さん利明さん博子さんに味あわせてあげたい。病気も良くなるのに……と思いつつトラック

をゆっくり走りました。汗びっしょり。

送っていただいたアラブのネット記事を読んでいたらトルコの反原発の闘いが載っていました。日本の新聞では見かけなかったのですが……。『スイノブ原発反対派、在イスタンブール日本総領事館前で反対運動』というタイトル。「4月16日、スイノブへの原子力発電所建設について日本の国会で投票が行われる前に、原発に反対する市民グループが正午頃、在イスタンブール日本総領事館の前で記者会見を開いた。日本領事館前で黒い花輪を持ちプロテスト。トルコ語、英語、日本語で「核合意を断れ」と書いた花輪を庭に残した」とのこと。「核反対プラットホーム」というグループ。日本の脱原発運動と交流しあって「原発輸出」を止めてほしいです。

5月2日 さわやかな春。明日から連休で、ベランダ運動に出たいところですが、9時から歯科指名医の先生の診察を朝通知されました。今までの義歯は摩滅が早いため、もう少し硬度のあるものに作り直してくれたのです。刑務所では定期的なメンテナンス調整はムリですし、できるだけ長持ちするようにしてくれたものです。午前中はその後に入浴。戻って「短歌特選の賞品」の「のし紙」を掛けたノート一冊を受け取りました。前に「俳句特選」の時はシャンプーでしたが今年がノートです。ありがたかったです。

届いた資料を読んでいるところです。国連では昨年の末に「2014年はパレスチナ国民と連帯するための国際年である」と宣言していたのを遅ればせに知りました。「今年はパレスチナ連帯年!」。改めて連帯を広げたい。PLOは国連と協調して広範囲に及ぶ活動を組織するための「国家委員会」を設立したようです。国連総会でも「国家」を承認されてきたし、国際法や国連の関連決議に従ってパレスチナ問題を解決すること、イスラエルの入植地、エルサレム、ガザ地区封鎖など、占領における問題を公正な世論に訴えていくことが目的のようです。

今日、ハマースの幹部がインタビューで、暫定統一政府の組閣前に「ハマースがイスラエルを承認する必要はない」「PLOが93年オスロ合意でイスラエルを無条件で承認したのはまちがいが」「国家承認は二国間で行われるもので、イスラエルがいまだにパレスチナ国家を認めていないのに、一政治組織のハマースがイスラエルを承認する必要はない」「我々は占領に抵抗する権利があり、武装闘争の選択肢を捨てることはない」と述べています。これは現地の人々にとっては極めて当然な考え方です。アッバスらのファタハ内にある既得権

を離さない「縁故主義」を変革しないとアメリカとの協調に流れ、暫定政権も選挙もあやういのです。ナクバの5月、人民の側の強い“統一”が変革を育てるよりに。そこに連帯を送ります。

また中東は選挙の季節で、トルコ、エジプトばかりかイラク、シリア、レバノンも選挙です。驚いたのはレバノンの大統領に、82年のサブラ・シャティエラでパレスチナ人を大量虐殺した「レバニーズフォース」(LF・レバノン軍団)の司令官だったジアアジアアが、爆殺されたスンニー派のハリリー首相の息子のサード・ハリリーの推薦も受けて、大統領候補として出馬! 4月23日1回目の投票では第1位! とんでもないと進歩社会主義党やヒズブラーも動いていることでしょう。

レバノン大統領はこれまで親シリア派。今のスレイマン大統領はシリア派ではないが反イスラエルの軍人だった人で、ヒズブラーも支持した人。レバノン大統領がイスラエルと密通する勢力になるのは何と危険なことでしょう。ジアアジアアは、シリアがレバノンの宗主国のように振る舞っていた時には死刑判決で獄中にいたのですが、レバノン大統領はキリスト教徒しか資格がありません。キリスト教徒もいろいろです。中東の情勢をしっかりフォロー分析学習していきたいと思えます。

「キタコブシ」も資料もお便りも届きました。連休前のお便りありがとう! Oさん、昔からきっちりしてましたものね。お便り拝見しました。U君、母上の七回忌だったのですね。お便り読みつつ昔を思い返しています。MMさん、5・11の成功を! TGさん、家族と共に体調を整えておられるのでしょうか。

5月3日 憲法記念日。今ほど、戦後の中で危機を迎えている日本はなかった……と改めて思う憲法記念日です。5月3日に毎年載る新聞の意見広告「殺すな、集団的自衛権は戦争への道、未来への責任9条実現」に熱い思いがこみあげます。9条は今も実現しきれていない。もっと外交に、生活に、9条の実現の徹底を! と願わずにはいられません。「9条の徹底」はまた「脱原発」です。原発輸出・再稼働・集団的自衛権・米軍基地も9条には相容れないものばかりです。暮らしの中から「強者」の利益の一方的な実現の国になってしまっている日本を問い返す契機として、今の危機を問いたい。日本の各地で憲法9条を護り抜く人々の集いが開かれているはず。憲法を読み、9条を朗読しながら、私も連帯します。

5月5日 立夏。明け方はベッドをガタガタイわす地震。3・11を思い出しました。どんより曇りと風と小雨。ここからは鯉のぼりは見かけません。

“犬死にを名譽の戦死とすりかえた戦争止める九条のち” 5月3日の歌零れました。憤りは良い短歌にはならないものですね。

5月6日 連休終わりの日。今日もまた個別的自衛権の「武力行使要件見直し」の一面記事。アメリカと一体に「民主化」の名でブッシュがイラク・アフガンへと侵攻したようにアジア含めて「正義の実現」を夢見ているのでしょうか。中国の人口に合った強大化にアメリカが相応に対応している姿に危機感をもって背伸びしている日本は、海外から見苦しいと思われていることでしょう。安倍の欧州訪問も売込みほどの反応もないようです。

5月、中東は新しい政治が動くのが恒例のところ

選挙で熱い日々。パレスチナの、イラクの、シリアの、エジプトの、そしてレバノンの友人たち、昔のリッダ闘争記念日を共に祝した友人たち、生きていて下さい！ 5月に連帯！

第122号の誤植のお詫びと訂正

- 5頁左列2行目 しっかり → しかり
- 9頁左列20-21行 器管 → 気管
- 同頁右列1行 極MIR → 極左MIR
- 同頁列下から3行 三件分立 → 三権分立
- 12頁左列3行 残念 → 断念
- 13頁左列下から14行 枝垂桜 → 枝垂梅
- 同頁右列9行 消却 → 焼却
- 14頁左列下から2行 規律 1つトル
- 16頁左列下から3行 東 → 東京
- 17頁左列14行 だけって → だけ違って
- 同頁右列14行 左翼 → 新左翼

★読んだ本★

（「日誌」の中の読んだ本への記述を編集室が抜萃したものです）

重信 房子

『わが煉獄』（四方田犬彦著）二度読みました。「読みました」と言っても読んだ気持ちは現在進行形のように漂っていて、まだ対象化できているとは言えません。言葉で詩の感想を紡ぐ困難さはいつも私を不安にします。でも、「誤読の権利は読み手にこそあり」という不遜さを携えて自分の感じた「わが煉獄」を記します。

この詩集には33編の独立した詩が編まれています。題名に示されているようにどの詩も別々の位相から煉獄を想起させそこに連れゆくようなのです。

わが煉獄

四方田犬彦



「舟」（「舟」の典故註にダンテ「天国編」第2歌とある）の詩は、第一番目と第三十番目にあります。

「小さな舟に乗る人たちよ/きみたちにはもう、わたしの姿は見えぬ/……/待つ目的がわかっていとき 待つことの半分は終わっているはずなの

に/……/はたして自分が何を待っているか 知らされていないのだ」（第一番目）。

「小さな舟に乗る人たちよ/きみたちにはもう、わたしの声は聴こえない/……/わたしは忘却の大きな波を越えたのだから/……/わたしはやがて到達した島で/赤銅を溶き分かつ炎の壕を潜り/晒し布に溜まった灰汁となるのだから」（第三十番目）

この「舟」の詩の間には「眼」の詩。“人生の相克”の煉獄を「壘」は“有限の命”の本質にある煉獄を「ニザール」も「牛糞」も「舟」と「舟」の間をたゆとい、朽ちゆくものの死、形を失い復権などありえない人生、生者の慰めを嘲笑しているようです。それは若者の人生と重なるのか、人が死の瀬戸際に立つことを強いられた時、あるいは生還した時、味わった諦念とあせりと欲求の炎を静かにとらえ返して写生しているような詩の数々です。

そのような「煉獄」をどの詩ももたっているように感じます。そして煉獄の炎の浄化の先には、天国も地獄も無いのだと教えられている気がします。黄泉の地はあるのだろうか……。人々は気付いていない。この煉獄が日常に反転し、己にふりかかることを。著者は自分の煉獄を普遍化し直視し、これからも写生し続けたいと願っているにちがひありません。

私は33編の中で「ニザール」は別として「星」と

「冠」の詩が好きです。「…蒼穹を貫き抜ける透明な悲しみから/きみはどれほど遠ざかってしまったか/大きな約束はかならず破れる/愛は成就されない/解放闘争は徒勞に終る/……/地上の誰も信じていないとき/きみは一番美しく輝いているというのに」（「星」より）

「冠」はさびしい希望の歌。失わない希望の印章のようで好きです。花の後枯れた葉茎の上のみっちりとした実をつけた向日葵の姿を「冠」としてうたっている詩です。「向日葵のうつむく冠に隠されし栄光の紋章加護のあれかし」と一首零れました。この詩集は、著者の博覧強記に隠された根っここの情念に触れる本です。

（3月14日）

『原発は滅び行く恐竜である』（水戸巖著 緑風出版）を読み終えたところです。

こんなに深く胸に残る本は稀です。本のタイトルは、原子核物理学者であり、まだ原子力発電が素晴らしいと言われていた初期から原子力発電の危機を訴えて来た著者の言葉から付けられたものです。この本は、涙なしには読めません。水戸巖という

著者がどんな人だったのか、その人柄が語られる度に、涙があふれてしまいます。

「はじめに」は、小出裕章さんの文です。まず、本の構成を目次から示すと、「反原発入門」という第1章では、原子力発電はどうしてだめなのか？ 17の質問に答えるスタイルで、原発の基本的問題を説明し、第2章では、「スリーマイル島とチェルノブイリの原発事故から何を学ぶか」を語り、日本の原発が同じ危険にあること、「3・11フクシマ」を明確に予測しています。1079年から1986年にも！ 第3章は「原子力—その闘いのための論理—」で、危険性を解明し、「原子力発電は永久の負債だ」「原発は原水爆時代と工業文明礼讃時代の週末を飾る恐竜である」と喝破し、「う〜んと唸りたくなるほど、水戸さんらしく、また原子力の本質を余すところなく捉えた表現だと思う」と小出裕章さん。第4章は「東海原発裁判講演記録」と各章編まれています。「あとがき」は、後藤政志さんで、70年代80年代に構築した水戸巖さんの論理がいかにか「フクシマ」の危険に言及していたのか、その論理の鋭さ、正しさを原子炉設計にかかわった者として、自分も含めて、科学技術的に解説しています。

この本は原発に対する明快な圧倒的な論理を学習できるばかりではありません。その後、「水戸巖に捧ぐ」とさまざまな方の惜別の追悼文、そして最後に「発刊に寄せて—水戸巖と息子たち」夫人の水戸喜世子

さんが「特別寄稿」しています。この本は一個人がこれほど誠実に生き、闘い続けたのか、そして突然の息子二人（二人とも父のように生きようと京大、阪大で物理学などを研究する学生だった）と共に、剣岳で消息を絶った。水戸さんの人柄がくつき



なぜ日本は変わることができないのか？
「この本は原発を止めるために書かれた。引くはなすは、人間はおかしのなかで生きていく……一瞬の思想を遂げ、国民一人ひとりの決意をもって『引き出す』ための現実的行動を促すべく、いまが最後のチャンスなのである。」
水戸巖著 緑風出版

りと浮かび上がってくる本なのです。この本の著者に対する他の人々の深い思いが胸を衝き、この本を深いものにしています。そういう意味では、この本は、「はじめに」の小出さんの文、そして水戸喜世子さんの「特別機構」をまず読んでから、じっくりと原発に関する内容に触れ、学習するのがよいと思います。

「はじめに」で小出さんは、当時、東大原子核研究所の助教授だった水戸さんについて、出合いをこんな風に記しています。

「私自身は、1970年秋から東北電力女川原子力発電所に対する反対運動に参加していた。女川でぼろぼろの長屋を借りて、ピラを書き、海沿いに連なる小さな集落を回って、ピラを配って歩いた。（中略。そんな中で、女川から原子力発電所まで、淡水を送る工事が行われるようになり、座り込んで数名の仲間が逮捕された。）自分たちの行為が正当なものであることを示そうと『略式起訴』を拒否し、原子力発電の是非を問うための正式な裁判を受けることにした、国を相手の裁判に協力してくれる学者、専門家はほとんど居なかったが、水戸さんは快くその裁判の証人になってくれた。小さな田舎の集落で開かれる小さな集会にも来てくれ、住民たちに原子力発電の危険性を話してくれた。東北大学で開いた学生相手の講演会にも来てくれた。それも貧乏学生だった差し出すほんのわずかの謝礼も受け取らない人だった。」

「私に原子力のことを教えてくれた人はたくさんいる。……しかし、私が恩師と呼ぶ人は片手で数えるほどしかいない。その一人が水戸さんである」と記されている。

追悼の文や小出さんの文も「水戸さんを慕う何よりの理由は、水戸さんが誰よりも優しい人だったからである」。権力には決して屈しない一方、「社会的に弱い

立場の人たちに徹底的に優しく」と述べています。

その水戸さんがチェルノブイリ事故の86年の暮れに剣岳で消息を絶った様子は、夫人の喜世子さんの淡々と記された文をぜひ読んでほしいです。水戸さんに対する脅迫の電話が頻発する中で、安全な子育てのために、東京と大阪に離れて暮らさざるを得なかったご家族。巖さんと同じような人柄の喜世子さんは、3人の不明の捜索によって他の友人たちや人々が二次、三次災害を起こすことがないかと気遣いながら死を確認していった様子は、涙で読みました。なんとすばらしい愛情で結ばれたご家族だったのだろう。反原発の人々の多くが体験しているように、脅かしに抗して父の信念と共に生きた息子、妻たち。死の現場もなんだか不可解もあつたのです。87年にアラブで水戸さん遭難を知った時、「謀殺されたのでは?!」と訊ねたほどです。私のまわりには「謀略」や「暗殺」がうごめいている地価戦争の地で、水戸さんの死をなんだか一つにつなげて考えてしまったためです。どれほど当時の時代の要の人だったか、知る人ぞ知る人でしたから。

私の知る水戸さんは60年代の反戦反体制運動に対する厳しい弾圧、逮捕、拘留に対して救援の手を差し伸べ、ご夫妻で「救援連絡センター」を創設した水戸さんです。あの頃大量逮捕と拘留も2泊3泊から23日拘留に変わり始めた時です。警察に留置された学生たちの歯ブラシやタオルの差し入れ、弁護士の見派遣と「救援連絡センター」が活動し始めたのは巖さんと事務局として身を粉にして闘った喜世子さんの努力からです。私も69年秋、初めて逮捕され、「救援連絡センター」の恩恵を受けた一人です。また、当時の党派の「内ゲバ」で救援ができなくなるのを憂慮し、反弾圧で権力に対して闘う者を差別しない原則を築いたのも水戸夫妻です。また、リッジ闘争支援岡本公三さんの軍法廷に出一人裁かれる岡本さんに対して、庄司弁護士は駆けつけてくださったのに、イスラエルは入国を拒否し、飛行機から降りることも許しませんでした。この時のことを後に庄司先生から聞き、水戸さんらの不屈の尽力に驚き感謝したものです。この本には、そうした水戸さんの「反弾圧戦線」での闘いには触れていませんが、是非「水戸巖さんの生き方」として喜世子さんに「特別寄稿」に記された内容をさらに一冊上梓してほしいと思います。

本の装丁がまたすばらしいです。喜世子さんを父、兄弟の死後、生き支えてきた娘さんの装丁でしょうか。

(4月6日)

『戦後左翼たちの誕生と衰退・10人からの聞き取り』(川上徹著・同時代社)を読みました。

著者は1940年生まれ。60年に日本共産党に入党。64年から66年まで全学連(民青系)委員長。その後90年に共産党を離党した人です。この著者が委員長の時代、私たちは明大二部学苑会の高橋事務局(民青系9から、学費闘争をめぐる学苑会を66年に私たちの側に(新左翼系に)変えたのを思いつつ読みました。

帯に「戦後新・旧左翼にフロント、解放派、第4インターフロント赤軍派、中核派、社会主義協会、共産党など、かつては所属し、あるいは現在も所属している10人。彼らはそれぞれの道を歩んできた。自らを振り返りつつ衰えの時代を共に考えた」と記されています。今の「危ない時代」の始まりを予感し、「多くの人々が一種の喪失感を味わっている時期、10人への聞き取りを行っていった」著者。「ほぼ完全に左翼と名のつくものは日本現代史の舞台から消え、衰勢に歯止めがきかなくなったのには根拠があり、それが何なのか? 権力によって打倒されたのか、それとも左翼自身が抱える内的要因によってなのか。とにかく私が左翼(日本共産党)であったころ、対立しあっていた人々が衰勢の中で今何を考えているのか、感情でも反省でもない、語れる範囲で聞いておきたいと考えた。」

もう一つの主眼として、一人ひとりの左翼の「誕生」、つまり「なぜその道を選んだのか」、「損得」ぬきのファイティングポーズをとったのか、その飛躍の実相を記録したい。それは時代の息吹が刻印されているはずだという問題意識です。それは時代の息吹が刻印されているはずだという問題意識です。かつての「日共」の著者が、違った党派の人と向き合い、誠実に時代と一人ひとりの若者の姿を描こうとしているものです。

登場する人々は本名で当時の自分を率直に語っていて、同時代を生きた私には多く身につまされ、また共感し、立ち止まって考えるところがありました。ことに「何故その道を選んだのか?」どの人も、友人や家族、環境の変化や出会いの中できっかけができ、正義や良心の命ずるままにふみだしていきます。敵権力に対する革命の実現の希望と共に、義理や人情、葛藤、様々な思いに駆られまた飲み込んで生きてきたのだな……。読みやすく心に届くのは、ここに登場する方々が、かつての「党」を背負わずに、「個人」として自らの革命参加の関わりを述べておられるからです。実に素朴で志に燃えた初心が、どの人からも伝わります。それが当時の時代の中で良心にかられた多くの若者たち(私も)共通のものであることに気がきます。こう

した個々の謙虚な心情を大切にしていたら党派の傲慢な通ちも少なかったらなあ……。衰亡の根拠は、党の「無謬性」に価値を置いて、「無謬性」「唯一性」を争い、現実を変える力を社会から学びえなかったからだだと思います。個々の良心は、党の「無謬性」や「指導」の観念に収奪されてしまったのでしょうか。

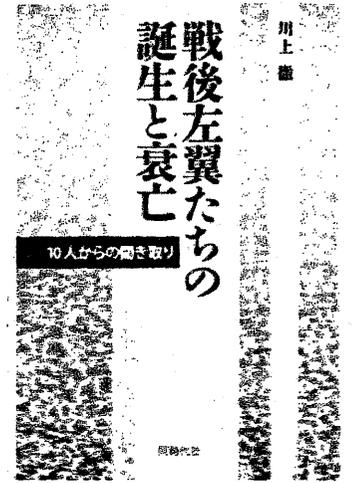
10人の聞き取りの一人である水谷さんを例に触れておきたいです。私と同年の水谷さんの父は、敗戦の8月、皇居前で同志12人と共に自決したとのこと。母が身重の時に死んだわけ。子供が生まれることを知りながらなぜ? というのがぼくの長い間の疑問でした。母親は、自らを戦争の犠牲者として納得できない怒りを秘めて、母一人子一人の戦後の出発を強いられたのです。母親は小学校の教師となり、日教組の組合員でもあつた中で水谷さんを育てたと、自分史を語っています。早稲田大学雄弁会で左翼に初めて会い、その傲慢さに驚き、しかしあらゆる権威に対する批判精神を見た気がして、これまで自分を育てた文化を卒業したとのこと。さらに革マル非革マルの対立にカルチャーショック。中核派を選び取っていく中で、早大学費闘争を闘い無期停学に。「なぜ中核だったのかと問われれば、そこに中核派があつたからとしか言いようがない。」そして、水谷さんは79年から革協同政治局員として活動し、2006年に離党。著者は、

「中核派を辞めるに至った事情経緯やその過程で、水谷自身が味わった苦渋なども正直に語ってくれた」と記しているが、それらはこの本には記録されていない。インタビューを受けたお連れ合いのけい子さんの切実な問題意識も読み

ごたえがありましたが、やはり紙面の足りなさでしょうか、もっと知りたい。「ぼくが指導部にいて多くの党員や関係者にかけて恥多き誤りや迷惑について、きちんと自己批判し謝罪しなければならぬと思っています」と水谷さんは語っています。水谷さん、水谷さんの生きてきた歴史を率直に語り記録することは、きっと多くの旧友や未知の方々へ教訓を伝えることになると思います。

友人小嵐さんをインタビューに、出生の時からのお話を一冊にしたためてほしいと思っています。

(4月19日)



ニューヨークタイムスの安倍批判

2014年4月28日 (沖縄屈辱の日)

萩尾 遼

オバマのアジア歴訪で、日米首脳会談が行われた。日米共同声明で、オバマは、安倍の要請を受けて、「尖閣列島」を安保の適用範囲と明言した。(ただし、領有権に関しては中立の立場を固持)「尖閣列島」をめぐる日中軍事衝突の際に、米軍の介入・支援を熱望している安倍の懇願は一見受け入れられたかに見えるが、事態はそう単純ではない。TPPのためのリップサービスということも言われている。安倍政権・防衛省・自衛隊は、専ら「尖閣列島」に中国の武装船団や軍が上陸・占領し、それを日米共同で奪還するというシナリオを描き、そのために日米共同軍事演習をしたり、自衛隊の海兵隊創設を目論んで、オスプレイや上陸用舟艇購入・ヘリ空母(オスプレイも搭載)建造などを進めている。だが、日中軍事衝突がこのような形で起こり、自衛隊が米軍の支援を得て「尖閣列島」に上陸して奪還する、という発想は、実戦経験のある米軍人によれば、素人考えではないかという。もしも、中国の武装船団や軍が上陸・占領したとしても、奪還ではなく、

空爆して叩き潰せば済むこと、その場合、中国が空軍力と長距離ミサイルで沖縄等の基地を攻撃する可能性が高い、と予想する。局部的紛争から全面戦争に拡大する可能性すらある。アメリカは、自国にとっての政治的軍事的経済的重要性を秤にかけて動く。米軍が必ず介入してくれると本気で考えていたら、無知も甚だしい。現憲法の下で、中国と本気で戦争をする気なのか? 最近の世論調査では、戦争の危険を感じている人は過半数を超え、かつ9条廃棄に反対する人も60%以上と増えている。民衆は安倍の戦争前のめりの姿勢にきわめて大きな危惧を抱いているということだ。

集団的自衛権行使容認という安倍の解釈改憲についてもオバマは支持した。当然といえば当然だろう。集団的自衛権行使容認ということは、日本が頼まれもせず米軍(米軍)を守るために参戦できるようにしたいということだからだ。第2次大戦から後、アメリカはずっと戦争を続けているが、日本も又アメリカと

もにずっと戦争を続けたい、と安倍は言っているのだ。だが、このようなことは憲法を変えない限り（9条を廃止しない限り）現憲法下では絶対にできないはずである。それを安倍は、自分が認めればできると言い、国民にではなくアメリカに許しを得てその気になっているということだ。

このような安倍の憲法を踏みにじっている行為に対して猛烈な批判が澎湃と起こっているが、なんと、ニューヨークタイムズまで「憲法を個人の意のまま変えようとする安倍首相を最高裁で裁けと警鐘」を鳴らす社説を出している。（2014年2月19日）

「日本の安倍晋三首相は、正式な修正によらず、彼自身の再解釈をもって、日本国憲法の基本理念を改変するという暴挙に出ようとしている。

日本国憲法では日本の軍隊（自衛隊）の活動は日本の領土内での防衛に限り許されているというのが一般的理解だが、これに反して安倍氏は、同盟国と協力し日本の領土外で攻撃的な活動を可能とする法律を成立させたがっている。これまで何年にもわたって削減されてきた自衛隊を増強するため、彼は精神的に動いてきた。そして他の国家主義者たちと同様に、彼は日本国憲法の条文にうたわれた平和主義を否定する。（中略）安倍氏は先の国会で、国民は次の選挙で彼に審判を下すこともできると暗に示したが、それは立憲主義の誤った見方である。安倍氏は当然、日本国憲法を修正する動きに出ることもできるはずである。そのため手続きが面倒すぎるとか、国民に受け入れられな

いといったことは、法の支配を無視する理由にはならない。最高裁は日本国憲法の平和主義的な条項について見解を示すことを長らく避けてきた。安倍氏がもし自らの見解を日本の国に押し付けることに固執するのなら、最高裁は安倍氏の解釈を否定して、どんな指導者でも個人の意思で憲法を書き替えることはできないことを明らかにすべきである。」

4月28日に開かれた「沖縄の今と天皇制を考える京都集会」で、池田浩士氏は、安倍のやっていることはヒトラーをも超えている、と指摘した。自民党は有権者の1/3以下の得票しか得ていないのに、自公で国会の絶対過半数をとり、閣議決定で憲法を変えようとしているのだから。安倍は、日本を米国と同じように、あるいは明治以後の戦前の日本のように、ずっと戦争し続けている国にしたいのだろう。消費税が8%になり、国民生活はますます圧迫されている。非正規雇用は今や全労働者の半数にもなり、今後ますます拡大されようとしている。残業代ゼロ等労働環境の悪化も加速度的にすすんでゆく。フクシマ原発事故等なかったかのように、原発再稼働を推し進め（「世界最高の規制基準だから安全」という新たな安全神話を誰が信じるのか？）、原発輸出（核拡散）も強行しようとしている。安倍のいう「日本を取り戻す」というのは結局そういうことだ。安倍政権を一日も早く倒さなければ、戦争と災厄の未来（既に始まっている）が待ち受けている。

アラブ物語(26)

「パリ事件」ハーグ闘争から日本赤軍結成へー74年(4)

重信 房子

（以下、前回に引き続き2005年10月31日の最終意見陳述からの引用です。）

(6) 占拠と交渉

その後、占拠部隊は在欧のPFLPメンバーに指示された要求書にそって要求し、対峙しましたが交渉部隊と分断された状態になりました。そこから、Wは在欧のPFLPメンバーたちがWたちに占拠させつつ、Y奪還のみならず、秘密交渉をやってお金を取ろうとしているのではないかと、アブ・ハニを疑います（W公判37回67～68頁）。そして分断されたことをよい機会として、交渉イニシアチブを持って作戦をつづけたわけです。

「むしろ積極的に、こちらでちょうどいい機会だから、交渉へゲモニーをもらえたら、もらっちゃおうというようなそういう考えに立っていた側面もあります」（W公判40回25頁）

こうして占拠部隊が交渉も行なったことによって、Wイニシアチブで、以降の交渉はつづけられました。

(7) ダマスカス着陸による作戦の解決

W自身、作戦後の帰還は指示に従って、アデンに行けばよいと考えていたし、アデン着陸のための安全保障の必要を考えずに行動しています。ところが、アデンでは着陸できず結局ダマスカスに降りるこ

とになりました。このダマスカスへの着陸によって、アブ・ハニ部局の手を離れて、PFLPの国際関係委員会による作戦終了帰還解決となったわけです（丸岡証言、重信公判30回43頁）。

以上のように、PFLPの作戦が途中からW日本人の実行部隊が交渉のイニシアチブを取ることで、PFLP側の計画が違った結末を迎えることになったのです。こうした一連を見れば、武器の問題であれ、ランディングであれ、Wがヨーロッパで在欧のPFLPの指揮のもとで行動し、また、決断した結果であり、何らハーグ作戦そのものに関して私がコミットしたり、自己批判するべき筋合いの事柄ではありません。（注：検察は「ハーグ事件は重信がPFLPと交渉し、準備。武器などがうまくいかなかったため、総括会議で自己批判した」というストーリーを主張したのに対し、反論すること。）

以上、2005年10月31日最終意見陳述より。

3) 1974年PFLPの事情

当時のPFLPは、大きな政治決断の時を迎えていた。73年第4次中東戦争以降二つの路線をめぐるPLO内の争いが激しくなっていた。

「ミニ・パレスチナ国家」を政治交渉によって実現する路線と継続的に民族解放闘争によってパレスチナ全土解放する路線が露骨にぶつかり合った。74年2月には、イラクバース党とPFLPを中心として、和平交渉から「ミニ・パレスチナ国家」路線に対する拒否戦線が結成された。PFLPは、「ミニ・パレスチナ国家」路線は全土解放戦略を放棄した詭弁であるとして糾弾していた。

そして、6月第12回PNC会議（パレスチナ民族評議会）を経て、路線対立は激しくなっていた。カイロで開かれたPNC決議文としては、PFLPの顔を立てて、「全土解放戦略」を堅持することを強調し、「その実現の主要闘争形態は武装闘争」などを確認した。そして、「その上で、自らの闘いによって被占領地の一部分でも解放された地に自らのオーソリティを形成することを認める」という内容を採択した。

これは他面から見ると、国際政治、イスラエルパレスチナ相互承認に呼応していこうとする、PLOの新しい転換を示す政治内容であった。この路線を踏まえて、アラブ連盟、イスラム諸国会議での「パレスチナ人の唯一合法的な代表はPLOである」という認知を経て、11月には国連総会にアラファト議長が登場していくのが74年である。



PFLPは、この74年6月のPNC会議で決議文に反対表明した。そして、ニクソン訪エジプトで、親米路線を踏み出したサダト路線に反対し、また、エジプトの仲介でアメリカとの交渉を企てているとして、PLO指導部を批判した。そして遂に74年9月27日には、PFLPはPLO執行委員会から撤退を宣言するに至ってしまった。

ちょうど、その政治的急転の頃、ハーグ闘争が闘われていた。そして9月13日以降ダマスカスに作戦部隊が着陸投降していた。

政治的には、PFLPはアラファト路線やシリアの路線に反対していた時である。当時のアラブ赤軍の私たち日本人は、PFLPの枠内で、国際関係部の仲介で、シリアと部隊の帰還交渉を行っていた。PFLPは、PLO執行委員会からの撤退をめぐる重い決断を行うという、PFLP始まって以来の時を迎えていたのである。

また、組織的には、PFLP内のアウトサイドワークのアブ・ハニに対する処分と矛盾の激化した時でもあった。73年の日航機ハイジャック闘争（ドバイ闘争）によって、アウトサイドワークの路線の逸脱、組織活動の是正処分などが行われてきた。その後も、組織決定や原則をめぐって、PFLPではアウトサイドワークに関する検討討議がずっと続いていた。この機会にアブ・ハニを追放しようとする反アブ・ハニ勢力も居た。しかしアブ・ハニはアウトサイドワークの側は、これまでの闘い方を変えなかった。むしろフリーハンドを求めてより独自性をもった闘いを行っていた。

パリでは、「モハメッド・ブティア・コマンド」の名で右翼系新聞社ローロール、週刊誌ミニユット、統一ユダヤ社会基金事務所などの爆破闘争を9月2、3日と行っている。PFLPは、「対象となった新聞は、欧州におけるイスラエル諜報機関の手先となっている」と、声明を発していた。これらはずっと繰り返されている欧州でのモサドによるPLO、PFLPらに在欧リーダーたちの暗殺に対抗した地下攻防の一環であった。73年、PFLPの在欧責任者だったパーセル・クバ

イシ、74年アルジェリア人モハマッド・ブティアなど、アラブ・ナショナリスト運動のリーダーたちが次々と暗殺されていた。

PFLP在欧部隊は、地下陣型の司令部に対する暗殺や逮捕の困難の中で再建しつつ、ハーグ闘争を闘った。後に在欧のPFLPメンバーが私の公判に向けた供述調書で、これらは、当時の条件で、武器の調達に支障があったことを述べている。

アラブ政治の流れもまた、大きな転換期にあった。第4次中東戦争を、和平交渉を有利に進めるための条件闘争のような位置においていたエジプトは石油戦略発動以降、イスラエルとの和平含めて欧米との協調を第一に進もうとしていた。宗教的理由からサウジアラビアは慎重であったが、エジプトは違っていた。74年、兵力引き離しからキッシンジャー外交にびったりと呼応してニクソンのウォーターゲート事件からの起死回生を助けるごとく、エジプト、イスラエルの和解の土台を作った。キッシンジャーは、ニクソンのエジプト訪問を実現し、膨大な米国からの借款の約束で、サダトを射止めたのであった。

もともと、サダトはもともとCIAに育てられた人物という人が私のまわりには多かった。70年にナセルが心臓発作で病死して以降、副大統領から大統領に昇格した頃からの噂だった。71年には、当時「次期大統領」と言われた左派のアリ・サブリラを突如逮捕した。「国家転覆の容疑」というサダトの予防的先行クーデターであった。これによって何百人も逮捕し、また数千人を超えるソ連の技術労働者を追放した。ナセルの親ソ路線解体はすでにナセルの死のすぐあとから始まっていた。このサダトがキッシンジャーと大手をふるって平和の道に進む時が始まろうとしていた。

この動きに、敏感に反応したのがリビアであった。リビアはナセリストカダフィーに率いられていた。リビア国内には、エジプト人の技術者、医師、教師など

知識人の労働者が何万人も溢れかえていた国である。そして、「アラブは一つ」の理念の下で、サダトはリビアと国家連合を約してきた。それが73年の中東戦争の前から亀裂が大きくなった。サダトがリビアの財源を当てにして、吸収するだけリビアの援助を絞り上げながら国家統合をサボタージュし始めたのである。

73年、ドバイ闘争の同じ時間、リビアの群衆がカイロに向かって万の単位で国家統合を求めてデモ行進していた。以降、益々溝が広がった。カイロのサダト大統領は、リビアの金よりもキッシンジャー、ニクソンの金を選びつつあった。

こうして、カイロの動きをめぐって、中東の政治が再編期に入っていこうとしていた。PFLPは、もともとアルジェリア、南イエメンと歴史的に人民革命やアラブ民族主義運動での同志的關係にあった。その分、アルジェリア、ユーゴスラヴィアを旗手とする非同盟諸国との交流もPFLPを支えていた。こうした流れを土台に、リッジ闘争後イラクパース党と関係を深めた。

そして74年、ミニ・パレスチナ国家路線粉碎を主張し、エジプトサダト路線を糾弾する中からこれまで対立していたリビアとの関係も改善されつつあった。PFLPはPLO執行部を撤退しつつ、社会主義諸勢力政権と友好を維持し、アラブではアルジェリアやイエメンの他に、イラクパース党やリビアなどの石油資源を持つ急進的南国との関係をとらえようとしていた。

それは、また、シリアとの繊細な対立関係を意味した。シリアパース党とイラクパース党は対立関係にあったからである。シリアとの対立関係は、私たちの活動にも後に作用することになる。アラブ諸国、国際動向の歴史的転換の中にPFLPは置かれていた。

そのPFLP指揮下から脱し、独自の組織路線を歩もうとしていた私たちアラブ赤軍も、その流れの中にあつた。(つづく)

後期

重信さんの癌の回復が進んできて、もうそろそろ移監ではないかと、言われだして久しく、どこか遠くに送られてしまうのではないかと恐れながら待っていましたが、最近の血液検査の結果、また数値が正常値以上に上がってしまつて、もうすこし医療刑務所にとどまる様子。どうなのでしょう。先生はまた下がるでしょう、とあまり深刻に見てはおられない様子。また、異常もなさそう。それなら、お姉さんが近くに住んでおられる八王子にいられたほうが心丈夫ではないかと何かほつとしています。でも、早く病気を克服できた方が良いに決まっています。重信さんはキチンキチンと決めたことを遂行されるので、あまり無理をしないように気をつけて、のんびり過ごすのも良いですよ。真っ青な空に白い飛行機雲が一直線に伸びてゆきます。何か良いことがありそうな、さわやかな五月を楽しんでください。Y

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋 2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

頒布価格 500円

「正誤」表

第123号

- ①6P(3/20)左下から10行目 「ロシア制裁」→「ロシア制裁」(カッコ)
- ②7P左上から2行目「空しく空々しい解放宣言」を批判し、→「解散宣言」批判し、
- ③7P左上から5行目 「解放宣言」→「解散宣言」
- ④7P左上から16行目 解放宣言→解散宣言
- ⑤8P左下から18行目 と欧は非難した→と(トル)非難した
- ⑥9P(4/7)左下から1行目 ~この梅→この桜
- ⑦12P(4/27)左上から8行目 インティファダーの 89~90年→88年~89年
- ⑧12P(4/30)右22行目 射手→射干 三信体→三倍体
- ⑨13P(5/2)左下から15行目 「国家」を承認されて~→「国家」と承認されて~
- ⑩14P右下から13行目 それは若者の人生と~→それは著者の人生と~
- ⑪15P左下から16行目 1079年から→1979年から
- ⑫15P右上から13行目 ~を絶った。水戸さん~
→~を絶った_水戸さん(トル)
- ⑬15P右上から18行~19行目 「特別機構」→「特別寄稿」
- ⑭16P左17行目 地価戦争→地下戦争
- ⑮16P左下から13行目 ~軍法法廷出一人~→軍法法廷で一人
- ⑯16P右上から6行~7行目 民青系 9から→民青系(トル)から
- ⑰16P右下から19行~18行目 それは時代の息吹が刻印されているはずという問題意識です
→(ダブリなので削除)
- ⑱20P(囲み)1行目 後期→後記